

## 週 報

「信じます。

不信仰なわたしを、  
お助けください」。

(マルコによる福音書第9章24節)



人と神、人と人をつなぐ難しい働きをしています  
日本基督教団 西宮公同教会

〒662-0834

兵庫県西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691

FAX 0798-63-4044

郵便振替 01170-3-4901

ホームページアドレス

<http://www.koudou.jp/>

電子メールアドレス

[koudou@gamma.ocn.ne.jp](mailto:koudou@gamma.ocn.ne.jp)

## 小さな手大きな手

(前週よりのつづき)

新教出版社の「福音と世界」に、田川建三さんが、かつて15回にわたって連載していた「リーメンシュナイダーの世界」を、小林社長の配慮で入手することになりました。リーメンシュナイダーは、以前、関西神学塾でも、2年くらい田川さんが紹介していました。その時、その彫刻作品について、「…当時のヴェルツブルグの町のブルジョア（市民たち）の生き姿が彫り込まれているのである。それは群像でなければならなかった。…しかしまた、似たような顔を一列並べても、市民たちの群像にはならない。一人一人が、独特の個性として描かれねばならない」「…勃興しつつある都市の新しい力を担う存在として、当時のブルジョアたちは、一人一人が鮮明な個性を持ち、個性的な実力の持ち主であった」と田川さんは紹介していました。

この「…当時のブルジョアたちは、一人一人が鮮明な個性を持ち、個性的な実力の持ち主であった」は、関西神学塾で田川さんが、「ゴシック」について紹介した時も、それを作り上げた人たち、職人についても、繰り返しそんな風に語っているように思えます。

職人たちの生きた姿に込められていた精神は「相互扶助」だったのです。遅ればせながら、クロポトキンの「相互扶助論」（ピョートル・クロポトキン著、大杉栄訳、同時代社）を読んだ時の、第5章及び第6章の「中世都市の相互扶助」で、ゴシックの建物を作り上げた人たちのことに、多くのページをさいています。「…要するに、中世都市を明らかにするに従って、…相互扶助と相互支持のための、消費と生産のための、そして全社会生活のための緊密な団結を統制して、しかも同時に人々の上に国家の桎梏を課することなしに、芸術や、手工芸や、科学や、商業などにおける個人の各団体と政治団体との創造的天稟に十分な表現の自由を与えようとする企てであった」。

中村桂子を、少し本気で読むきっかけになったのは、「母の友・最終号」（2025年3月号）の「“生きもの”として生きる／中村桂子」を読むことになってからです。藤原書店の「中村桂子コレクション」は、とりあえず2冊手元にはありましたが、全部をそろえて、ぼちぼち読み、少し前の「科学者は人間である」を読み、新しい「日本の『食』が危ない！／生命40億年の歴史から考える『食』と『農』」などにも目を通しました。それらで、一貫して問われ、かつ明示されている「人間は生きものであり、自然の一部である」は、2025年4月からの、西宮公同教会の歩みの、一つの「標語」として使わせてもらうことになりました。「日本の『食』が危ない！／生命40億年の歴史から考える『食』と『農』」は、そのかけらくらいを、借りている畑の、タマネギ、じゃがいも、さつまいも、イチゴ作り、それらを育てかつ食べる、教会学校の子どもたちとの活動の中で、実践してきましたし、今も、そしてこれからも、続けたいと思っています。

クリスマスの頃になると、必ず読む絵本の一冊が「サンタクロースってほんとにいるの？」（てるおかいつこ・ぶん、すぎうらはんも・え、福音館書店）です。それを書いている暉峻逸子の「サンタクロースを探し求めて」をずっと以前に単行本で読んでいて、改めて読み返そうとしたのですが、見つかりませんでした。それが、岩波現代文庫になっているのを教えてもらい、少し丁寧に読むことになり、改めて、著者の暉峻逸子の「何者であるか」を、少しは知ることになりました。それは、「サンタクロースを探し求めて」の「あとがき」で明確に書かれています。

「…この本を書きながら私自身、なぜ『サンタクロースってほんとにいるの？』を書いたのか、自分探しの旅をした。そしていま、このように考えている。『サンタクロースってほんとにいるの？』は子どもたちに対して書いた『豊かさとは何か』および『豊かさの条件』であり、『豊かさとは何か』『豊かさの条件』は大人に対して書いた『サンタクロースってほんとにいるの？』だったのだと』。